

曹洞俳壇

選・村松五灰子

麦青む耀歌かがいの山の麓にも

千葉県 鈴木 英子

評 山とは筑波山のことであろうか。大昔、年に数回未婚の男女がご馳走などを持ち、山に登り歌を交わしたり、舞を楽しんだ。それを耀歌（歌垣とも）と言う。今風に言えば婚活か。青麦が広がりを、また美しい山に歴史を偲ぶ深さも。

牡丹散る音なき音の響きけり

山口県 御江やよひ

評 映像の牡丹は、はらりと静かに散る。まさに大輪は女王の崩れ。その終焉の美しさゆえ大地に碎ける音が作者には聞こえたのである。しみじみと牡丹に寄せる心の一句。

◆雪解けて潰れし空屋出て来たり 福島県 西木 甚

◆春泥を来て閉校の式にをり 岩手県 鈴木 道昭

◆微笑める母の遺影に新茶汲む 静岡県 村松 保子

◆春寒の水琴窟の音確か 大阪府 数藤 茂

◆座布団を替へたるのみの夏座敷 秋田県 小田嶋恭葉

◆芋植うる農の手引き書そのままに 岐阜県 千藤 恵三

◆古里は懐ふかし麦の秋 東京都 矢野 祥子

◆うららかや明治の布のキルト展 埼玉県 日尾野安子

◆青き踏む老いて尚増す好奇心 神奈川県 小野沢邦彦

◆芝桜仮設住宅土留めに 岩手県 阿部 熙子

*選者吟

星月夜飛驒の地酒に眠らばや

五灰子

*作句小見

諸共に踊りて明日はちりぢりに 柏翠

お盆には古里へ帰りお墓参りと盆踊り、そんな昭和の光景も珍しくなった昨今ですが、まだところによっては残っている町中で案内見かけたりします。何となく嬉しくなります。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

友釣りの鮎つらなりて宙を舞ひたもに入り
たり光とともに
埼玉県 橋本 永子

評 友釣りは鮎の縄張り意識を利用して行われるらしい。「たも」は魚を捕る網のこと。釣り上げられた鮎が宙にひるがえる様子が陽にきらめいて美しい。結句の「光とともに」が命を釣り上げるといふ悲哀感をかすかに漂わせる。

波乗りの板を抱えて浜をゆく少女の顔に夕

陽赤あか
東京都 野村 信廣

評 夕暮れの浜辺でサーフィンを楽しむ少女。髪が濡れて海の雫が滴つてもいただろうか。それは捨象して健康そうに日焼けした顔にのみ焦点を当てて詠う。そこが印象的だ。

- ◆木割り場の青空喫茶に使ふ湯は焚火が匂ふ薬缶の湯なり
長野県 毛涯 潤
- ◆お向ひの少女は小学六年生下アゆカモシカの貌をのぞかす
福岡県 三吉 誠

◆凍て冬をいかに生き来し雀二羽チチとさえずる弥生朝明
福井県 三浦 豊子

◆鮎解禁あすに迫りて老医師臨時休診の札を下げをり
秋田県 小田篤恭葉

◆うすくうすく薄く林檎の皮を剥く戦中を耐え戦後生き来
兵庫 前田あつ子

◆満天星の小花ほつほつ咲きはじめ朝の庭に細き雨降る
山形県 多田 さよ

◆絹針で細かくこまかく縫いはじむ心静めて無心になりぬ
山梨県 北村 富子

◆病む妻に不意の来客ある時は付き添う吾が持て成しの役
鳥取県 山本 浩一

◆法堂に蛙の声の入りくればグアグアグアグアツと墨を磨
山口県 横川美代子

◆踏まれてもすぐ立ち上がる雑草に明日があるさと教えら
静岡県 杉山ひとみ

※選者詠
源泉の噴気孔より谷間に星の原初の声こた
まする
ちづ

*作歌小見

火山活動が世界各地で活発化しているという。水惑星と呼ばれる星の声に耳を傾けたいと切に思う。戦火で人間同士が傷つけ合っている場合ではない。前田さんの林檎の皮には平和への希求が込められている。



大本山永平寺



集中人権学習

永平寺では毎年八月に、集中人権学習会を行っております。これは、九月に行われる「被差別戒名物故者追善供養法会」の主旨である、過去に被差別部落の方々に差別戒名を授けたという事実に対し、仏教者としてのあるまじき行為を深く反省し、二度と過ちを繰り返さないことを誓い、心からの追善供養をさせていただくためです。また、「あらゆる差別の撤廃と人権啓発の運動にとりくみます」と曹洞宗の布教教化方針にあるように、あらゆる差別の撤廃を目指すための学習会でもあるのです。

お釈迦さまは、生きとし生けるものの幸福を願い、大いなる慈悲の心で教えを説かれました。慈悲の〈慈〉とは「相手の幸せを願い、力になること」で、〈悲〉は「相手の身になり、苦しみから救い出す」という意味です。そしてこの実践を「慈悲行」といいます。つまり、お釈迦さまのみ教えを学び行っていく仏教者が人権問題に取り組むことは、必然のことなのです。

修行僧は人権学習を通して、差別やいじめ、虐待等の事実に触れることにより、他の苦悩と向き合い、自らのこととして受け止め、自分には何ができるかを考え、仏さまの行いである「慈悲行」を実践していこうと、真摯に学んでおります。

ご本山だより



大本山總持寺



祖跡巡拝

大本山總持寺では七月にお盆の行持を修しますが、修行僧たちの出身地ではほとんどが八月盆となっています。

八月盆の時季になりますと、本山の修行僧たちは、数日間それぞれの寺院に戻ってお盆の行持を勤めたり、手伝ったりすることが許されます。

特にこの春に上山した新到和尚たちにとっては、上山以来、初めて寺院へ帰省することになります。

今年の春に行脚姿となり、期待と不安を抱いて故郷の寺院を旅立った新到和尚でしたが、お盆には見違えるようにたくましくなって寺院や出身地に戻っていくのです。

上山以来、ずっと愛弟子のことを心配されていたお師匠さまや、寺族・檀家の皆さまにとっても、まことに嬉しく感慨深い再会に違いありません。

また、今月末には、三松会という安居者の会の主催による「祖跡巡拝」が行われ、ご開山瑩山禪師や二祖峨山禪師ゆかりの地や寺院を訪ねます。

この祖跡巡拝により、修行僧たちは曹洞宗や大本山總持寺の歴史を間近に学ぶことができます。特に今年には二祖峨山禪師大遠忌の年でもありますから、報恩の二泊三日巡拝にもなります。